

## 労働の尊厳か，あるいはバートルビー

青 木 克 仁

The Dignity of Labor, or Bartleby

Katsuhito AOKI

### 要 旨

私達は、「生きるために働く」という理屈によって、自分の労働を正当化しようとする。日々、生活の糧を得るために、嫌な仕事であろうが辛い仕事であろうが、「生きるためには働かなければ」と自分に言い聞かせながら働き続けている。しかし、「過労死問題」は、「生きるために働く」という、この正当化の陰にあって決して光が当てられることのなかった選択肢の存在、即ち、「生きるか、あるいは働くか」に気付かせてくれる。高橋まつりさんが亡くなる前に残した「生きているために働いているのか、働くために生きているのかが分からなくなってからが人生」と書き込みに表現されているように、彼女の場合、「働くこと」と「生きること」は、あたかも鳥もちで分かち難く貼り付いてしまっており、「生きる」ために「働く」を選択しないという可能的なあり方に向かう扉が閉ざされてしまっていた。本論考では、「生きるか、あるいは働くか」という選択肢に示される可能性を、ハーマン・メルヴィルの小説『書記バートルビー』の読解によって得られる政治的な可能性と重ね合わせることによって追求する。バートルビーのように、「生きること」と「働くこと」に分断線を刻み入れることで見えてくる「非意味」という名の政治的抵抗の可能性に道を開く。

キーワード：労働の尊厳，過労死，バートルビー，無限判断，ジジエク

### 序 論

2015年のクリスマス、広告代理店、電通の入社9カ月の社員、24歳の高橋まつりさんが、自らの命を絶つという事件が起きた。彼女の死因は、月100時間以上の残業による過労死であると認定され、労働組合との協定に定められた上限を超えた残業をさせていたがゆえに労働基準法違反の疑いで、電通本社に労働基準監査官が捜査に踏み入った。「過労死」とは、まさに、「働き過ぎが原因となって引き起こされる死」のことだ。2001年には、過重労働と過労死との因果関係を判定するために「過労死ライン」が提起されている。「過労死ライン」とは、「過労死を引き起こす過重労働による脳や心臓疾患の労災認定評価基準」で、厚生労働省が規定するところによれば、発症前1か月間に約100時間、または発症前2～6か月間に一か月あたり約80時間を超える残業

があった場合、過労死の危険性が高まるとして、過重労働との因果関係を認めている。この基準に照らし合わせれば、月100時間以上の残業を強いられた高橋さんの場合は、まさに「過労死」に当たるということになる。報道を通して彼女のSNS上の書き込みが紹介されており、そこには一日の睡眠時間が2時間であるとか、毎日次の日が来るのが怖くて眠れないとか、土日出勤が決定し本気で死にたい、などといった言葉が連ねられている。残された言葉の中でも、「生きているために働いているのか、働くために生きているのかが分からなくなってからが人生」なる書き込みから聞こえてくる悲痛な叫びが、哲学的思索を喚起し、ハーマン・メルヴィルの小説『書記バートルビー』の世界に共鳴を求めて稲光のように鋭い閃光を走らせて消えていったかのようと思われる。本論文では、このバートルビーの物語を一つの参照項にして論を展開していくことになるだろう。

通常、私達は、「生きるために働く」という理屈によって、自分の労働を正当化しようとする。日々、生活の糧を得るために、嫌な仕事であろうが辛い仕事であろうが、「生きるためには働かなければ」と自分に言い聞かせながら働き続けているというわけだ。特に家族をなし、養うべき子どもがいるとなれば、労働は一つの義務としての重みを持つように感じられるようになるだろう。しかし、「過労死問題」は、「生きるか、あるいは働くか」という、この正当化の陰にあって決して光が当てられることのなかった選択肢の存在に気付かせてくれる。この選択肢の存在は、さらに、最近盛んに行われるようになった議論、即ち、AIやロボットの発展に伴って今まで人間の仕事とされてきたものがどの位AIやロボットに奪われ失われることになるのか、という議論、によって際立たされることになるだろう。AIあるいはロボットによって代替可能となるかもしれない仕事のリストが挙げられ、将来的に社会システムの中に人間の居場所が残されるのか、ということが議論され始めている。この手の議論も「生きること」と「働くこと」は実は切り離すことが可能なのだということを示唆している。一旦、このような選択肢が可能であることが浮かび上がってくると、人間は本当に働くべきなのだろうか、という問いに突き当たる。しかも、それを「労働の義務」として受け入れることは、私達が思っているほど「当たり前」のことなのだろうか、と問わずにはいられなくなる。

### §1. 調律：『バートルビー』の物語

『おそれとおののき』のケルケゴールに倣って、本論考のベースとなる物語を導入することから始めよう。ハーマン・メルヴィルは、『書記バートルビー (Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-street)』という不可思議な短編を書いている。この物語の語り手でもあり、またバートルビーの雇い主でもある弁護士法律事務所、書記として雇われた謎めいた若者、バートルビーを巡る物語である。バートルビーは寡黙で自己について語ろうとしないだけでなく、語り手が告白しているように、全く伝記的資料が欠けているがゆえ、一体どのような生まれで、どういった経歴を経てこのウォール街の法律事務所に来てきたのかに関しては完全なる空白なのである。バートルビーは初めの内は、語り手が「異常なほどの分量」という程の書写の仕事を経験するように黙々と続けるのだが、同僚書記の書写したものの確認を命令されると「そうしない方が好ましいのですが (I would prefer not to)」とだけ語り、徹底的に命令された作業を回避する。

この日を境に、雇用主の命令には例の決め台詞で応答するだけで、自分の書写したものを訂正

しようとしなければかりか、挙げ句の果てには書写そのものをも止めてしまい、解雇を言い渡されても、「行かずに済めばありがたいのですが」とだけ答え、ただただ事務所に居続けるだけの存在になっていく。あたかも伝説のギリシアの画家、パラシオスの描いた「カーテン」のような、そうした空白に、語り手は己の欲望を誘われてもするかのようになり、受動的抵抗を続けるバートルビーの存在の謎を前に、自己の常識を脅かされつつも、完全に見放すことができなくなっていく。かくて語り手は、バートルビーを追い出すことができずに、彼を残して、事務所を移転するはめになるが、いつまでも居座っているバートルビーは、建物の家主から呼ばれてやって来た警察の手によって、浮浪者として「墓場（刑務所）」に送られてしまう。語り手は、刑務所にまで赴き、彼が困らないように食事の世話までするのだが、バートルビーは、食事を拒んだまま、眠るように死んでいくのだ。

## §2. 労働の尊厳

ジグムント・バウマンは、『新しい貧困 労働、消費主義、ニューブア』の中で、「労働倫理」と呼ばれるモラルの持つ二つの明示的な前提を明らかにしている。その最初のものは、「幸福に暮らすために必要な何かを得るために、人は賃金を受け取るに値すると他の人々から見做されることを行わねばならない」というものだ。これによれば、「無料のランチ」などなく、人は常に「ギブアンドテイク」の関係にあり、後で与えられたいのなら先に与えねばならないということになる。まさに、この「ギブアンドテイク」の互恵性の円環の中に囚われてしまった者達にとって、この円環の外部を否定し、内部に閉塞するための呪詛（ルサンチマン）の声こそが、「働かざる者、食うべからず」なのである。二番目の明示的な前提は、「既に獲得してしまったことで満足し、それ以上を望まないのは悪いことであり、自分の持っているもので満足し、それ以上を望まないのは、恥ずべき不合理であるし、更なる労働の活力を得る以外の目的で休息をとるのは不名誉なことである」というものだ。こちらの方は、労働者をそのまま消費者に等値することで、消費社会に移行した後でも、資本主義を駆動させるための論理として不可欠な前提となっていく。これは、テロとの戦いを宣言したジョージ・ブッシュ、ジュニアが、アメリカ国民に「買い物」を呼びかけた時にあからさまに示した論理である。これらの前提は、「労働の尊厳」、即ち、働くこと自体が崇高で賞賛される活動だ、ということを示している。

労働倫理は、「近代」の産業化の段階において、近代的価値に対する障害物とされた民衆の慣習、即ち、工場労働を回避し、機械時計によって設定される生活リズムへの従属への抵抗、を退けるための口実としての役割を果たしてきた。前近代においては、一旦慣習化した欲求が満たされれば、もはや働き続ける道理はなく、それ以上お金を稼ぐ理由を見出すこともなかった。人々は、労働はそこそこに行い、他にも存在する、お金では買えないか、お金ばかりを追求していたら見落としてしまうような面白い事どもを楽しんでいた。

バウマンは、歴史は常に勝者の手で書かれるという観点から、「労働倫理」を捉え直し、「労働倫理」なるものは、進歩に対する民衆の抵抗に勝利した側の残した、戦勝を記念する一つの「公式記録」の中に記載されている用語なのだ、としている。実際に、近代化が浸透していく中で、職人から転じた労働者にとって、前近代の職人氣質の名残すらも市場の無情な経済効率の前に消えてしまったのだ。近代化の過程において、誇りも、名誉も、努力する根拠も、無縁化されて、一日ただただ働き続けるような規律を課せられることになってしまうのだ。かつて労働の

意味を自分で見出し、目的も自分が設定していた人達を、他人が設定した目的の下で、それを遂行することが本人にとって何の意味も無いような職務に従事させるよう仕向けることこそが、「近代」における喫緊の課題となったのである。かつての職人技に求められていたような卓越した技能やそこから内発的に湧き上がる誇りを否定されても、そうしたことを気にせず職務を遂行するような従順な存在に馴致してしまうように、「労働倫理」の名の下に、内発的な自由が放棄されるに至ったのである。こうして、労働者は、工場制システムの中の一つの「歯車」になることによって、労働の主体として謳歌し得る自由を放棄することになるのだ。

近代化において、労働の様相が変化した理由の一つは、産業革命に端を発する機械の導入による大規模組織化にあるのだが、機械的な管理ルーティーンに労働者を従わせるのに一役買ったのが「機械時計」である。産業革命による機械の導入と「機械時計」による労働管理は、人間の自然の時間を完全に奪うこととなった。「機械時計」によって計測され、機械のリズムに動作を従わせる、非人格的、非人間的な工場労働に、一つの「歯車」として何の考えも抱かずに従属するだけの労働様式が存在するとしたら、それは、まさに奴隷労働に他ならない。

自分の「生きられる時間」を自分の意志で自由にできずに、均質化した時間の形式の中で費やすように強制されることに「搾取」の本質がある。自分の生きられる時間を自分の意志で自由にできるという状態を仮想した場合、それは自分が自分の必要に基づいて生産するということになるだろう。こうした「仮想状態」を搾取が存在しない理想状態として置いた場合、本来なら自分が自由にできるはずの時間が他者のために強制される時間になった時、そこに「搾取」が存在する。「生きられる時間」が、「商品」となるためには、近代が生み出した「直線的な均質時間」の枠組みの中で計測される必要があるのだ。

バートランド・ラッセルは、『怠惰への讃歌』の中で、歴史的に見れば、生産物を力づくで奪い取った支配者階級が、生産者達に「労働の尊厳」という道徳をもたせたと力説している。「一生懸命働くことは道徳的な生き方である」という考え方が、労働者階級に浸透すれば、労働者は進んで労働に精を出すだろう。このようにして、支配者階級は、搾取の構造を覆い隠すことに成功してきた。日本でも近代化を推し進めるにあたって、明治政府は、山縣有朋を中心にして、進んで減私奉公する人材の育成のために、二宮金次郎をモデルとして普及させた。二宮金次郎は、まさに日本版のベンジャミン・フランクリンとして、資本主義の精神を国民に植え付け、勤労を尊ぶ価値観を浸透させるためのモデルとなった。洋の東西を問わず、武力で無理やり労働を強制するのではなく、かつて奴隷がしていたことを人々が自ら進んで行うように仕向ける巧妙な仕組みがつくられ、国民を馴致していったのだ。すると、「労働の尊厳」とは、労働を「直線的な均質時間」の鑄型に流し込むことによって生まれる単調さに対して、不平も不満もなく、従順に従う労働身体を形成する方略の名前だったのだということが理解できるだろう。つまり、「労働の尊厳」は、「近代」という時代が要請した、人々を動員するために編み出されたイデオロギーに過ぎない、ということなのである。

### §3. 労働力を売る

そもそも労働力を売るということは自明なのだろうか、という疑問がある。『大転換』の著者、カール・ポランニーは「交換の経済 (Economy of exchange)」と「生存の経済 (Economy of livelihood)」を区別する。生存の経済は、そもそも利潤原理には乗らないような社会的、公共的



な活動領域に関係する。医療、教育、福祉、環境保全などのような分野は、人間関係の構築のように時間が必要であったり、自然に限りがあり生存に不可欠ゆえ独占から保護し汚染から守らねばならなかったりするため、市場の効率性に任せるわけにはいかない領域である。行動経済学者のダン・アリエーは「社会的規範」という言い方をしているが、まさに「市場規範」とは区別される「社会的規範」が働く領域なのだ。

「交換の領域」において、市場競争が激化していくことになり、極端な資本主義が登場することになる。ポランニーは、1930年代の大不況期を「大転換の時代」と呼ぶ。この時に、「自己調整的市場」が登場する。この時に、「生産要素」の商品化が起きる。ここでポランニーがいう「生産要素」とは、「労働」、「土地」、「貨幣」であり、もともと自然や社会の領域にあったものが、市場原理に晒され商品化してしまうことになる。ここに至って、市場が「自己調整的」という形容を付して呼ばれるようになる。

イギリスでは、19世紀に、賃労働が一般化し、「労働市場」が誕生する。また、元々は、貴族の所有物であった土地が流動化し、売買されることになる。また、金本位制によって貨幣が世界市場を行き来するようになる。元々、社会の中に固定されて存在していたものが商品となり、市場で売買されるようになることで「自己調整的な自由市場」が誕生した。

「土地」、「労働」、「貨幣」は、カール・ポランニーによれば、本来「商品」として扱ってはならないものなのである。ポランニーが指摘しているように、生産の原点は人間と自然の相互作用にある。彼は、この相互作用が市場の自己調整メカニズムの中に組み込まれ、再組織化を被ることに懸念を表明していた。「労働」という名で人間が、「土地」という名で自然が、売買の対象にされ、「擬制商品 (Fictitious commodities)」とされることで市場システムの下に置かれることになる。かくて、人間と自然の運命が市場システムに委ねられることは、ポランニーに言わせれば、「結局のところそれらを破滅させるも同然であるという事実を、商品化擬制は無視していたのである」(p.179)

それならば、何故、人間と自然の運命を市場システムに委ねることを憂慮すべき現象として受け止めねばならないのだろうか。「商品」の本質は、「それが再生産可能であるかどうかという点」に存している。伝統的どの文化社会においても、「土地」は「公共財」としての扱いが普遍的だった。「土地」を「商品」にして売れたからと言って、「再生」は不可能である。生態的な全体性が備わっているものを、部分に切り分けてしまうことは問題があるというわけだ。「労働」の商品化とは、一度過ぎれば終わってしまう、不可逆な人生の時間を切り売りして、そこから賃金を得ることをいう。「労働」によって切り取られた人生の一コマが再生産し得ないのは、生の時間の不可逆性が根底に存するからなのである。産業革命期に「機械時計」の導入とともに、人間的生と時間が無関連化し、均等化した時間が外側から強要されるようになる。均等化された時間の中で、生活時間を維持するために生活時間を売らざるを得ないという生活様式が常態化していく。すると、この観点から「過労死」問題を考えると、切り売りした労働の所為で、死に至る「過労死」の場合、まさに、生の時間の不可逆性の意味が剥き出しになって、労働を売買することと人間の生との間の不調和が浮き彫りになる。「過労死」によって、人間の不可逆な生の時間が奪われていく。掛け替えのない人を失った人達にできることと言えば、もはや生の時間を取り戻せない死者の代弁者として、死者の抗議の声を取り戻そうとすることだろう。二度と同じものが生まれぬユニークな一回性を前に、生者ができることはそれを記念することだからだ。

ウィリアム・モリスは、『ユートピアだより』の中で、中世の職人は、生活に必要なほんのわ

ずかな代金でも、職人として、いくらでも時間をかけて仕事をしていたが、賃金を貰うようになると、その賃金に見合った分しか働かなくなってしまう、と述べている。これは、一度、労働が売買の対象になってしまうと、自分の人生の一コマを「切り売りする」ことになるという感覚が嫌でも芽生えてしまうという事実を如実に表している。ヘレナ・ノーバーク＝ホッジが『懐かしい未来』の中で語っていたような、仕事とも遊びともつかないような感覚が職人の仕事にはある。「名人の技は遊びのごとく」と形容されるような、そうした感覚はまさに生きることの充実感を与えてくれ、「いくら時間をかけて仕事をして」も、それが苦痛に転じることはない。しかし、そうした感覚が、自分の仕事が労働として売り買いの対象となった途端に消失し、賃金に見合った労働しかなくなってしまふのだ。

疎外とは、人間を人間と見做さず道具か何かを扱ような関係に陥ってしまうことであり、人間が人間でなくなることをいう。労働をしている間は、そこに自己充足感を覚えることができず、労働から解放された時にやっと自己に戻るようなあり方は、まさに、労働に本来あるはずの「やりがい」からの疎外が起きているからなのである。生きる充足感が喪失した時、そこには消耗と疲弊しか残らないことだろう。人間の生き甲斐や価値が全て金銭に換算され始めた時代に、お金の換算し得ない価値が見失われ始め、やがては忘却の彼方に去ろうとした時に、そうした価値を救い出そうとした思想家が存在していたことに感謝し、彼等/彼女等の記述を読み直すべきなのだろう。

バウマンの言う「アンダークラス (Underclass)」とは、「正常な社会の階級システムの外部に投げ出された人達」を指す。こうした「アンダークラス」の人達を描いた映画として、デンゼル・ワシントン主演の映画『ジョン・Q』がある。この映画では、フルタイム労働者からパートタイム労働者への格下げと同時に保険を削られた主人公が、自分の子どもに心臓移植手術という高額な手術を受けさせてやることができなくなり、やむを得ず、銃を持って病院に立てこもり、暴力に訴えてでも息子の手術を受けさせようとする。この映画の中で、主人公、ジョンQの友人に当たる人物が、ジョンQが立て籠もる病院を背景に、テレビ・インタビューを受け、次のように語る。「世の中には、ブルー・カラー (肉体労働者)、ホワイト・カラー (頭脳労働者) の他に、ノー・カラー (階級無き者) がいるんだよ」と。「ブルー・カラー」や「ホワイト・カラー」のように、「ゲーム」板の上でプレーできる人ならまだましだろう。確かに、「ブルー・カラー」は搾取され、抑圧されるだろうが、未だ「ゲーム板」の上でプレーヤーとしてプレーできるし、万分之一の可能性しかないにせよ、敗者復活に与るかもしれない。けれども、「ノー・カラー」になってしまったら、「ゲーム板」の外に弾き出されてしまって、ただただ一生涯、ゲームの外で、苦渋を舐めねばならず、腐臭が漂うまでは、誰にも気付かれない「死」を迎えるかもしれない。この映画で言われている「ノー・カラー」こそが、まさに、「経済発展がもたらす産業」が生み出した「アンダークラス」なのだ。カナダの活動家ナオミ・クラインが、『貧困と不正を生む資本主義を潰せ』という本の中で紹介しているFATTに賛同するカナダの国際貿易担当大臣、ピエール・ペティグリュエの言葉を引用しよう。「(現代の経済システムでは) 弱い者は搾取されるだけではなく、排除される。その富を生み出すのに、あなたは必要とされないかもしれない。不要な人間の排除は、搾取よりもっと進んだ段階なのだ」(p.170) と。つまり、「ノー・カラー」であるのなら、そもそも「ゲーム板」でプレーすることすらできないゆえ、「経済に不要な人間」とされ、排除されるのだ。

チョムスキーは、『アメリカを占拠せよ』の中で、2005年にシティグループが投資家向けに出

したパンフレットにある諷い文句を引用している。そのパンフレットのタイトルは「プルトノミー：ぜいたくな暮らしを買う，世界でもまれな人々」で，その冊子には，「世界は二つのブロックに分かれつつあります—プルトノミーとそれ以外に」と記されている。「プルトノミー」は，ギリシア語で「富」を意味する「πλουτος」から造語され，「富を独占的に支配する一部の富裕者層」を指す。それに対して，「プレカリアート (Precariat)」という用語がある。それは，「社会の周縁で不安定な生活を送る人達」を指す。「不安定な」という意味の“Precarious”と「労働者階級」を意味する，お馴染みの“Proletariat”を合成した言葉である。チョムスキーは，当時，経済の神様扱いされていた，アラン・グリーンズパンの言葉を引用する：「この経済の成功は，労働者の不安定さが増すことに極めて多くを負っている」つまり，働く人達が，プレカリアート化すれば，余裕を失った彼等/彼女等は，もはや権利の要求をしなくなり，より良い賃金も給付金も得ようとしなくなる，というのだ。プレカリアートは，用が無くなれば，放り出せばいい，というわけで，これがグリーンズパン流の「健全な経済」なのだ。かくて，世界は，1%のプルトノミーと99%のプレカリアートに分断されてしまうことになった。

バブル崩壊後の「失われた20年」と呼ばれるようになった時期に，人件費を抑制するために，低賃金労働力を増やすという「新自由主義」的な手法が浸透していく。その帰結として，気付いて見れば，「ワーキングプア (Working poor)」として括られるようになった労働層が出現していた。どんな仕事であろうが，仕事がない限り，日々の生活をも送ることができないような現実がある限り，ありついた仕事をしないという選択自体があり得ない。こうした現実が支配していれば，AIやロボットは人間にとって最大の脅威として映るだろう。なぜなら，AIやロボットは，プログラムされている以上，どんな仕事でも遂行するだろうからだ。

パートルビーは，たとえそれが自分の雇用者に命令された仕事でさえ，「しないことを好む」という理由で行わない。『パートルビー』の最後の場面は，この物語の語り手でもある，パートルビーの雇用者の口から思わず漏れ出る言葉，「おおパートルビー，おお人間性 (Humanity) ！」で幕を閉ざす。まさしく，雇用者の命令でさえも聞き入れないという，この選択肢は，現段階におけるAIやロボットが示し得ない，そうした選択肢なのである。己に刻印されたプログラムを超えて「しないことを好む」という選択肢を自らの行動原理として選び得るAIやロボットは，今のところ存在していない。まさに，このパートルビーの摩訶不思議な物語は，人間性の本質を指し示して終焉を迎える。物語の序盤では，パートルビーは食事にも散歩にも出掛けずひたすら書写を行う機械のような男のように描かれている。そんな男の物語の最後を飾る形容がなぜ「Humanity」なのかという答えを，ここに探ることができよう。しかもこの言葉が彼の雇用者の口について出てしまう。語り手＝雇用者がパートルビーという出来事にトラウマ的な衝撃を与えられ，それが最後に「Humanity」という一語に収斂するのである。

#### §4. 気付かれ得ない最初の疎外

池田隼人が，1960年首相となり「所得倍增計画」を唱え，「奇跡の高度成長」を主導することになった時，「所得倍增計画」に始まる「成長のための成長」路線を支える二本柱として，「農業基本法」と「全国総合開発計画」の二つを打ち出した。「農業基本法」は，「所得倍增計画」の翌年，1961年に施行され，「農業構造改善事業」として具体化していく。それは，具体的に言えば，農村部小農民保護の打ち切りと農業部門の近代化，即ち，機械化，それから化学農業化というこ

とだった。「全国総合開発計画」は1962年に施行され、「新産業都市建設促進法」として具体化していく。要は、公共投資による工業開発ということだ。このようにして、小農民保護が打ち切れ、離農して都市部に流出するしかない人達を「賃金労働者」として、工業開発のための労働者、そして、工業労働者に変換するという「仕組み（アーキテクチャー）」が作られ、人々はこれに誘導され、農村部による生産と都市部における商品市場化による消費という分離が帰結した。この仕組みが、高度成長期を支え、社会の基本的な構造を決定した。

中でも、社会学者、見田宗介が指摘している「貨幣への疎外」が起きたことは特筆すべき事態である。見田が言うには、貧困は金銭を持たないことにあるのではなく、金銭を必要とする生活の形式の中で、金銭を持たないことにあるのだ。彼によれば、「Xからの疎外」に論理的に先立って「Xへの疎外」があるという。例えば、貧困は「貨幣からの疎外」と言えようが、見田の論理に従えば、これに先立って、「貨幣への疎外」が存在しているということになる。つまり、それは「貨幣経済へ参入させられる」ということなのである。なぜならば、お金を使うような社会に生きなければ、お金のことで苦しまないわけだからだ。従って、「貨幣への疎外」が先ず存在するゆえ、「貨幣からの疎外＝貧困」が存在するということになる。貨幣を媒介としてしか豊かさを手に入れることのできない生活様式に投げ込まれてしまう時、「所得」が豊かさを測る唯一の尺度になってしまうのだ。先住民の暮らしなどを見れば、「金銭」がなくとも、十分自給自足し得る豊かさを享受し得ることが分かる。むしろ、こうした人々の生活が根を下ろしてきた自然や共同体との社会的繋がりが解体されてしまい、「経済システム」に縋るしかなくなってしまった時に、「所得」のみが唯一の物差しになってしまうというのが真実なのだ。ゆえに、「貨幣への疎外」という出来事は、自然や共同体の解体という出来事と深く結びついていることになる。貧困の定義として、世界銀行等では、「一日あたり生活費が1ドルという水準」ということを挙げるが、これは、貧困の「貨幣への疎外」という側面を完全に見落としているわけで、貧困の適切な定義とは言えない。なぜならば、貧しくても幸福というあり方が可能だからだ。貧しくともそこそこ幸せであると感じる人達を搾取することは、帝国主義者達が味わったように難しい課題なのだ。トルーマン大統領の下、「開発経済学」を一から鍛え上げ、途上国のエリート達に学ばせるといった戦略を編み出したアメリカのように、「開発・発展」を至上の価値とすることで、自給自足圏において「貧困の近代化」を成し遂げるしか道は残されていなかったのだ。

イヴァン・イリイチは、自給自足圏に幸せに暮らしている人達が、搾取される「人材」として「労働力」を捧げるしかなくなってしまふ事態を指して、「貧困の近代化」と呼んでいる。自給自足圏に暮らし、そこそこの幸せを感じているがゆえに搾取することが困難な人達を搾取し易い形に変換していくことこそが「貧困の近代化」であるのなら、「貧困の近代化」の過程には、必ず、見田の言う「貨幣への疎外」がなければならぬことになる。「貨幣への疎外」を受け入れてくれるような貧困地帯は、未だ「金になる貧困」なのだ。しかし、「金にならない貧困」地帯は、「絶対的貧困」と名付けられ、「国境なき医師団」のような、本当に善意の人達しか救出の手を差し伸べようとはしない。しかし、自給自足圏に暮らしていた人達も、「貨幣への疎外」の途上で、幸福の他の幾つもの次元を失ってしまい「貨幣」で測られるしかない「裸の存在」にされてしまったのである。



## § 5. 無限判断の開く可能性

『ロベスピエール/毛沢東』の中で、ジジエクは、バトルビーの示した政治的な可能性について論じている。“I would prefer not to”を文字通り受け取り、「I would prefer “not to”～しない方が好き」であるとしている。バトルビーは、この台詞によって、雇い主からの命令に対して、賓辞を否定するのではなく、「賓辞でないことを肯定する」のである。「そうすることを好まない」とは決して言うてはいないのだ。ここには、カントの否定的判断と無限的判断の差異が刻まれているとジジエクは読み解く。

『純粹理性批判』の中で、カントは、肯定判断、即ち、「AはBである」、否定判断、即ち、「AはBではない」に加えて、無限判断、即ち、「Aは非-Bである」を持ち出してくる。カントの使用している例だと、「魂は死なない」は否定判断だが、「魂は不死である」は無限判断である。否定判断は、「～ない」という否定の述語を持つ。無限判断も、否定文のようではあるが、述語は肯定判断をなすという形式をとっている。「魂は不死である」は、「死ぬべきではない何か」の存在が指し示されている。肯定判断も否定判断も認識され得る何かを示しているが、無限判断は、認識され得ないのだが想定し得る何かの存在へと開かれている、そうした判断なのである。ゆえに、ジジエクは、否定をすることに終始する「抵抗」や「異議申し立て」の政治ではなく、覇権を巡り、肯定・否定に分かれる陣取りの外にある新たな空間の可能性を開く、そうした政治のあり方を、バトルビー的な無限判断から読み取っているのである。

今度は、このジジエクの読解をヒントに精神分析の知見を援用してみよう。肯定/否定/無限判断のカント的三項についてのフロイトの考察を借りて、さらに論を深めていこう。私達の言語システムは、まさに、「意味（肯定）/無意味（否定）」の二項対立というコードによっている。だが、この時、「意味/無意味」のコードを保持するために「非意味」が排除されている。フロイトが分析してみせたように、「Da（ある）/Fort（ない）」という言語コードを受容するためのゲームは、一旦、母親の在不在を操るゲームとして幼児に全能感を与えるが、実は言語の呪術的操作によって実際には母親が現れるわけではないゆえ、幼児が無力であることを思い知らせる「去勢」のゲームでもある。すると、人は言語コードの習得時に、「去勢」を経て、何かを排除してしまうことになる。排除される何かは「非意味」なのだ。「非意味」の排除をもって、「意味/無意味」の言語コードが安定する、というわけだ。すると、ジジエクがバトルビーの決め台詞を「無限判断」と結びつける時、それは、まさに、排除されていた「非意味」の領域を再び開く力を持つことになるだろう。この「非意味」の領域は、前節で述べた「Xへの疎外」という気付かれ得ない最初の疎外が起きる以前の領域に誘うだろう。

「働かない/働く」「ブルジョア/プロレタリアート」の断絶線を解消してしまうような「非意味」は、システムを保持するためには忘却されていなければならないだろう。実際に、これが、見田宗介が言うような「貨幣への疎外」という事態が起きてしまった後、忘れ去られてしまったことになった領域なのだ。一旦、「意味/無意味」の言語コードの主体である道を歩み始めると、何も変わらないことを終始確認するために能動的であるだけの「能動的受動性」（ジジエク）において社会イデオロギーが再生産され続けるのみである。実際に、今年度も、よき「人材」に自ら能動的になろうとして多くの若者達が労働市場へ参入しているではないか。ジジエクも言うように、バトルビー的政治とは、「受動的能動性」という姿勢を貫き、「～しないことを好む」という形で参加を拒絶し、能動的に受動性へ撤退するのである。それは、「意味/無意味」の二部法が

隠蔽している「非意味」の領域を開くような撤退なのである。そこには「賃労働という形で働かなくとも生きていける」そうした可能性が開かれており、例えば、ラダックの生活様式を「懐かしい未来」という形で一つの可能性として開示したヘレナ・ノーバーク＝ホッジが指し示しているような未来への開けが存在しているのだ。それは、「労働の尊厳」に馴致される前には誰もが知っていた懐かしいはずの、「Xへの疎外」以前の伝統的生活様式へと連れ戻してくれることだろう。

ドゥルーズは、バートルビーの「決め台詞（定式）」の力について、「好ましくないもの」だけではなく、「好ましいもの」をも消去する力を及ぼすという効果について論じている。実際に、確認をして欲しいという語り手である法律家の要求を「しない方がいいのですが」と言うや否や、今まで好んでしていたはずの書写することもできなくなってしまう。即ち、あらゆる「好ましくないもの」を拒むだけではなく、定式によって保存されるはずの「好ましいもの」であるはずのものをも拒むのである。ドゥルーズは、「好ましくないもの」の項と「好ましいもの」の項の二つの項の間を不分明にしてしまうという効果を有すると結論する。それによって「不分明地帯」を穿ち広げていく。こうして、「意味/無意味」両項がともに不能にされ、「非意味」という「不分明地帯」が開示されるのである。

## 結 論

労働市場なるものができたことによって、「生きるか働くか」という究極の選択肢があることを一旦忘却し、「生きるために働く」という正当化によって己が売り渡した「労働力」に価値を見出そうとしている人達がいる。彼ら/彼女らは、高橋まつりさんがそうだったように「生きるか働くか」という選択肢に曝され、高橋さんの言葉を借りれば「眠りたい以外の感情を失った」状態で、まさに機械的に「働くこと」にしがみついてしまう。「生きているために働いているのか、働くために生きているのかが分からなくなってからが人生」と書き込みをした彼女の場合、「働くこと」と「生きること」は、あたかも鳥もちで分かち難く貼り付いてしまっており、「生きる」ために「働く」を選択しないという可能的なあり方に向かう扉が閉ざされてしまっている。しかし、バートルビーは、「生きること」と「働くこと」に分断線を刻み入れる。バートルビー的な生き方は、何と、「生きるか働くか」という形で、究極の選択肢を剥き出しにして見せてくれる。バートルビーは、「働くということもありかもしれないが…」という留保をつけつつも働かない! 正確には、“I would prefer not to”という決め台詞を吐き続ける。こうして「働く」から切り離されて生きる、という「Xへの疎外」以前の「生」をそのまま示すのだ。

労働によって不可逆な人生の時間を切り売りするのは人生を豊かにするためではなかったのか。その当の労働が人生の時間をそのまま削り取っていただけのために使われ、生物的な最低限の必要をさえ保証し得ないのだったら、それでも労働に尊厳があるのだろうか。こうした事態が、現実のものとなってしまっている時、私達は、労働を売買の対象から外そうと考えたカール・ポランニーの警告を思い出すべきだろう。

## 引用文献および参考文献

アガンベン、『バートルビー』、高桑和巳訳、月曜社、2005。

- イリイチ、『生きる思想』、桜井直文訳、藤原書店、1999。
- カント、『純粹理性批判』上中下巻、篠田英雄訳、岩波文庫、1961。
- クライン、『貧困と不正を生む資本主義を潰せ』、松島聖子訳、はまの出版、2003。
- ジジエク、『ロベスピエール/毛沢東』、長原豊他訳、河出文庫、2008。
- チョムスキー、『アメリカを占拠せよ』、松本剛史訳、ちくま新書、2012。
- ノーバーク=ホッジ、『懐かしい未来』、「懐かしい未来」翻訳編集会、2011。
- バウマン、『新しい貧困 労働、消費主義、ニュープア』、伊藤茂訳、青土社、2008。
- バウマン、『《非常事態》を生きる』、高橋良輔他訳、作品社、2012。
- ポランニー、『大転換』、吉沢英成訳、東洋経済新報社、1975。
- 見田宗介、『現代社会の理論』、岩波新書、1996。
- メルヴィル、『書記バートルビー/漂流船』、板野有通訳、光文社、2015。
- モリス、『ユートピアだより』、五島茂他訳、中央クラシックス、2004。
- ラッセル、『怠惰への讃歌』、堀英彦訳、平凡社、2009。

